

避難について知っておこう

避難の心得

いざというときのために、日頃から避難に必要なものを整理し、避難の手順について話し合っておきましょう。また、災害の危険性が想定された場合には、情報を入手して、早めの避難を心がけましょう。

 <p>状況により、すばやく避難しましょう 避難情報などが発表されていなくても、状況などから判断し、自主的に避難しましょう。</p>	 <p>浸水時、自動車での避難は危険 普通自動車は約30cmの浸水で走行困難になります。浸水時、自動車での避難は危険です。</p>
 <p>浸水時に長靴は厳禁 避難には運動靴が最適です。長靴は水が入ると歩けなくなります。動きやすい服装で避難しましょう。</p>	 <p>家族には連絡メモを残そう 外出中の家族には、「どこへ避難する」といったようなメモを残しておくといいでしょう。</p>
 <p>避難時はブレーカーを切りましょう 避難の際は、浸水による漏電や、電気火災の予防のためブレーカーを切ってから避難しましょう。</p>	 <p>集団で助け合おう 単独での行動は避け、近所の人たちと集団で決められた場所へ避難しましょう。</p>
 <p>持ち出し品は最小限に 非常持ち出し品はリュックサックにまとめ、両手が自由に使えるようにしましょう。</p>	 <p>安全なルートで避難 避難場所への経路は、川べりや地下歩道などは避け、できるだけ安全な広い道を選びましょう。</p>

※避難施設に着いたら、係の人の指示に従い、住所・氏名を報告しましょう。

水平避難と垂直避難

災害では早めの避難が重要です。ただし、すでに避難経路が浸水しているなど、危険が間近に迫っている状況での無理な避難行動はできるだけ避けなければいけません。そのような場合は、避難準備・高齢者等避難開始や避難勧告が発令されていても、がけや浸水区域から離れる（水平避難）だけでなく、近くの頑丈な建物の2階以上や自宅の2階といった高い場所へ移動（垂直避難）して救助を待つという判断も必要です。



浸水後の避難 やむを得ず移動する場合は…



▶ 歩ける深さ
浸水時に歩ける深さは膝くらいまで。腰まで浸かって歩くと体力を消耗します。また、水深20cm位でも、流れが速い場合は危険を伴うことがあるので注意が必要です。



▶ 足元に注意
浸水により足下が見えにくくなることで、道路と側溝や水路等の区別がつかなくなります。長い棒などで深い場所がないか安全を確認しながら歩きましょう。

大雨が降りそうなときは…

雨が強まってきたら、まずテレビやラジオ、インターネット等で発表される気象庁からの注意報・警報・特別警報や、市区町村などからの避難に関する情報に注意しましょう。不要不急の外出は控え、危険な場所には近づかないようにしましょう。



- 床下・床上浸水の危険があります。家財道具や貴重品を高い場所に移動しておきましょう。
- 地下には避難しないようにしましょう。
- 豪雨で視界が悪くなると非常に危険です。あせらずに高台に移動しましょう。
- 浸水でエンストしたときは、無理に再始動させるとエンジンを傷めてしまいます。
- 急な増水や土砂災害の危険があるので、河川敷から堤防の外に移動しましょう。
- 雨が降ってなくても、サイレンなどの警報が聞こえたら、すぐ退避しましょう。

土砂災害から身を守るためのポイント

● 危険度の確認〈住んでいる場所が「土砂災害（特別）警戒区域」かどうか確認〉

土砂災害発生のおそれのある場所は「土砂災害（特別）警戒区域」とされています。あらかじめ自分の家が土砂災害（特別）警戒区域にあるかどうか、ハザードマップや町のホームページなどで確認しましょう。

● 情報の入手〈雨が降り出したら土砂災害警戒情報に注意〉

雨が降り出したら、「土砂災害警戒情報」に注意してください。テレビやラジオの気象情報で発表されるほか、気象庁や、町のホームページで確認できます。▶長雨や豪雨に注意…急に強い雨が降ってきたときや、ずっと雨が降り続けているときには、土砂災害が発生するおそれがあるので警戒しましょう。

● 早めの避難〈危険を感じたら早めに避難〉

お年寄りや障がいのある人など避難に時間がかかる人は、移動時間を考えて早めに避難させることが大事です。また、土砂災害の多くは木造住宅の1階で被災しています。どうしても避難場所への移動が困難なときは、次善の策として、近くの頑丈な建物の2階以上に緊急避難するか、それも難しい場合は家の中でより安全な場所（がけから離れた部屋や2階など）に避難しましょう。



危険を感じたら、ただちに避難！ 局地的大雨(ゲリラ豪雨)

近年、急激に発達した積乱雲に伴う局地的な大雨(ゲリラ豪雨)による痛ましい事故が起こっています。このような事故は、雨による災害への警戒・注意を促す大雨警報・注意報に至らないような雨量でも起こることがありますので、川の中や川の近くにいるときは注意が必要です。遊んでいる子どもや工事の作業員は、周囲の状況の変化に気付きにくいので、保護者や監督者は危険を感じたら、すぐに避難を呼びかけましょう。総雨量は少なくとも、十数分の短い時間で甚大な被害が発生することがあります。